

山梨県立文学館 館報

1989(平成元)年
11月 創刊

第111号



企画展「まるごと林真理子展」によせて
林真理子 2

企画展「まるごと林真理子展」
展示資料より 3

企画展「まるごと林真理子展」
展示資料より 4

館からの「案内」 5

資料翻刻 小暮理太郎、深田久弥 6・7

田部重治宛書簡 6・7

館の日記 利用のご案内 8

企画展

「まるごと林真理子展」開催

2020(令和2)年9月11日(金)～11月23日(月・祝)

林真理子は、一九五四(昭和二十九)

年に山梨県山梨市に生まれ、県立日川高等学校、日本大学芸術学部を卒業。コピーライターとして活躍後、一九八二(昭和五十七)年に初めて刊行したエッセイ集『ルンルンを買っておうちに帰ろう』がベストセラーとなる。一九八六年には「最終便に間に合えば」「京都まで」で第九十四回直木賞を受賞し、作家としての地位を確立した。その後も一九九五年に『白連れんれん』で第八回柴田錬三郎賞、一九九八年『みんなの秘密』で第三十二回吉川英治文学賞、二〇一三年『アスクレピオスの愛人』で第二十回島清恋愛文学賞など多数の文学賞を受賞



林真理子

している。現代社会の恋愛や家族、歴史上の人物、古典文学など、多彩なテーマを巧みな語り口で描き、旺盛な執筆力で長期にわたり第一線で活躍し続けている。本展は作家・林真理子の業績と作品の魅力を紹介する。

■関連イベント

○林真理子オーブニングトーク

「まるごと林真理子展」によせて
聞き手 三枝昂之(当館館長)

9月11日(金) 13時30分～14時30分

会場 講堂 定員 240名

申し込みは締め切りました。

○対談 林真理子×辻村深月

物語をつむぐ時間

9月27日(日) 13時30分～15時

会場 講堂 定員 240名

申し込みは締め切りました。

○林真理子 講演会

本棚のある風景―林書房と私

11月1日(日) 13時30分～15時

会場 講堂

■年間文学講座

○年間文学講座2

林真理子「女文士」―評伝文学の魅力
10月17日(土) 14時～15時30分

講師 大木志門

(東海大学文学部教授)

会場 講堂 定員 50名

申込方法 10月3日(土) から電話で
受け付けます。

○年間文学講座3

林真理子作品の女性たち
9月22日(火・祝) 14時～15時10分

講師 中野和子(当館学芸員)

会場 講堂 定員 50名

申込方法 9月8日(火) から電話で
受け付けます。

受け付けます。

*講座は先着順で定員になり次第締切となります。参加無料。

○閲覧室資料紹介「林真理子を読む」

9月11日(金)～11月23日(月・祝)

会場 閲覧室 入場無料

小説、随筆など林真理子作品が掲載された資料を手にとりご覧いただけます。

特設展

「飯田龍太展 生誕100年」

会期決定

新型コロナウイルス感染拡大のため、四月二十五日(土)からの開催を延期しておりますが、令和三年一月二十三日(土)から三月二十一日(日)までを会期として実施することとなりました。会期中の関連イベントについては、決まり次第、当館のホームページ等でお知らせします。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、二月二十八日(金)から展示室・閲覧室・研究室を休室し、四月七日(火)より休館しました。五月二十二日(金)から常設展を、六月二十三日(火)より閲覧室を、感染防止対策を施し再開しました。

企画展

「まるごと林真理子展」によせて

林 真理子

昔から冗談まじりに、よくこう言われる。「ハヤシマリコって、本当は四人ぐらいいるんじゃないの?」

自分でも時々感心することがある。二百数十冊の本を書きながら、世界中いろいろな国を旅してきた。人が一生に一度、味わうか味わえないような素晴らしい経験もたくさんしてきた。

ウィーンオペラ座での舞踏会
フランスベルサイユ宮殿での晩餐会
中国で新刊書三冊刊行とプロモーション

中東二カ国で講演旅行：
ダイアナ妃にも、サッチャーさんにもお会いした。

文化人の団体のリーダーを長く勤め、いくつかのボランティアもしてきた。

週刊誌、月刊誌に連載をたくさん抱え、その合間に結婚もし、子どもも育てた。自慢ついでに言うと、三十八年間、常

に第一線にいたと思う。

もちろん最初から順調な道を歩んできたわけではない。

世の中の既存の常識や良識を破ってしまえ、というかけ声と共に、一冊のエッセイ集でデビューした私は、軽薄で出たがり屋の女の子、という肩書きを担うことになった。

あのままだったら、単に面白い変わったエッセイストとして私はすぐに消えてしまったに違いない。それからコツコツと私は小説を書き始めてきた。レットルをつけられるのが何よりも嫌いな私は、不倫小説がベストセラーになった時は、どんなに編集者から頼まれても、同じようなものを二度と書かなかった。

「世間の人の裏をかきたい」という思いは常にあつて、歴史小説も早い時期から書いていた。そして家族小説、医療小説と、私の小説世界は広がっ

ていった。が、私は同時に、三十五年近く二つの週刊誌にコラムを書き続けてきた。ひとつはこのたびギネスに申請された「週刊文春」の連載であり、もうひとつは「an・an」の連載だ。

「まだやっているの」と驚く人も多くいるが、そう、まだ続けているのである。

書くことはつらくしんどい。今、週刊誌に引きこもりをテーマに連載小説を書いているが、さまざまところに取材をしなくてはならず、ストーリー展開も非常にむずかしくて、呻吟することもしょっちゅうだ。

しかし、書くことが快樂とならなくて、職業作家になることは不可能だと私は断言する。私は未だに手書きであるが、いつしか右手が勝手に動き出し、さまざまな人の会話が聞こえ始めるあの瞬間、かの田辺聖子先生が

「神さまが降りてくる」とおっしゃる時を感じることが出来たから、私はこれほど長いこと作家を続けられたのであろう。

私は不思議でたまらなくなる。勉強も出来ず、スポーツもからきしダメ。ぼん

やりとして、時々おかしなことを口にする少女、それが私であった。が、思い出せば常に母から多くのことを言われてきたような気がする。

「自分が何も持っていないことを知りなさい」

「とにかく自立しなさい。女一人で生きていける人になりなさい」

三年前、一〇一歳でこの世を去った母は、典型的な山梨の女であった。辛抱強く賢かった。そして私など太刀打ちできないほどの教養と見識に溢れていた。

「その私がどうしてこんなに貧しく、故郷でみじめに生きているのか、よく見てくださいなさい」

無言で母は私にいろいろなことを伝えていた。今回の林真理子展には、母「みよ治」の資料もかなり出した。なぜなら私をつくり出した多くのものは、母だとつくづくわかっていくからである。

最後に存命者としては初めてという、この企画展をつくり出してくださった、関係者の皆さま方に心から感謝します。

二〇二〇年夏の終わりに

*本稿は同展図録に掲載。(九月十一日発行)

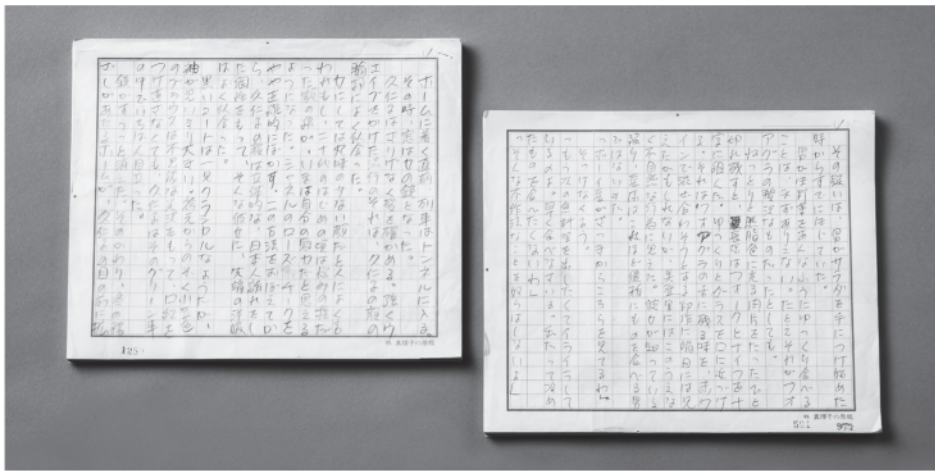
企画展

「まろ」と林真理子展

展示資料より

林真理子「最終便に間に合えば」「京都まで」原稿

日本近代文学館蔵



林真理子は、「星影のステラ」、「葡萄が目にしみる」、「胡桃の家」でそれぞれ第九十一回、第九十二回、第九十三回の直木賞候補となり、一九八六年に「最終便に間に合えば」「京都まで」で第九十四回直木賞を受賞する。発表は「オール讀物」一九八六(昭和六十一)年四月号誌上に、受賞作、選評とともに掲載された。

受賞作「最終便に間に合えば」(写真右)と「京都まで」(写真左)の原稿は、それぞれ七十七枚、八十一枚で、いずれも二十字×二十行ピンク色罫、右下欄外に「林真理子の原稿」の印刷がある専用の原稿用紙に、鉛筆で書かれている。同じく日本近代文学館が所蔵する、選考委員の池波正太郎、五木寛之、井上ひさし、黒岩重吾、陳舜臣、藤沢周平、村上元三、山口瞳、渡辺淳一の選評原稿も展示する。

松本清張 帯文(林真理子『ミカドの淑女』)原稿

個人蔵

林真理子『ミカドの淑女』(一九九〇年九月 新潮社)は、下田歌子(一八五四〜一九三六 教育者・歌人)をとりまく、明治の宮廷を襲った一大スキャンダルの真相を、当時の宮廷風俗を交えて描いた



作品。

松本清張(一九〇九〜一九九二 作家)は、この単行本の帯文で、「これまでは書くのに困難だった題材に小説として初めて成功したと思う。抑制した筆で感覚的な描写をもちあげる著者の才能に目をみはる。学習院長の乃木希典が歌子を処分した理由の新解釈も斬新だ。」と賛辞を送っている。

林真理子「額に入れた帯文」(松本清張研究「第十一号 二〇一〇年三月掲載)に、文藝春秋の忘年会で初めて清張に会ったときのことや、編集者を通して『ミカドの淑女』の帯文を清張に依頼し快諾

を得て、生原稿をもらったことが書かれている。

「ペン字で何度も線をひいて書き直してあった。私はそれを額に入れ、今も部屋に飾ってある。私の年代でこんなお宝を持つている作家は誰もいない。苦労もあつたが、早くデビューして本当によかった。」とその時の感動を語っている。

この他の展示資料に、「葡萄が目にしみる」、「白蓮れんれん」、「不機嫌な果実」「正妻 慶喜と美賀子」「西郷どん!」などの作品原稿や、瀬戸内寂聴が描いた「つぶらなるまり子のひとみ阿波の春」額装、愛用の着物、帯、ドレスなどがある。



(学芸課 中野和子)

閲覧室より

閲覧室の

新型コロナウイルス対応 安全にご利用いただくために

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、閲覧室は長くご利用いただけない状況が続いていました。

六月二十三日(火)より、閲覧室内の消毒を徹底した上で、利用を再開しております。

今号では、皆様に安全にご利用いただくための取り組みを紹介します。

なお、この稿の執筆時(八月)と発行時の九月で感染状況が変化している場合もございますので、詳細は、当館ホームページやお電話などでご確認ください。

カウンター職員は、マスクを着用し、アクリル板越しに、短時間で効率的な対応に努めますので、ご了承ください。

室内は、座席を減らしておりますが、資料の閲覧は可能です。

書庫内の資料をご覧になる場合は、カウンターの職員にお申し出ください。

当館所蔵資料を検索できる「文献検索システム」やデジタル画像で文学資料をご覧いただくことができる「画像情報

システム」もご利用可能です。

また、当館収集資料に基づく文学関連のご質問への対応(レファレンスサービス)や文献複写サービス(少量の場合は即日渡し)も実施しております。

ただし、閲覧室内にある個人研究室・共同研究室・ビデオブース・マイクロ室については、「密閉・密集・密接」を回避することができないため、まだご利用いただけません。

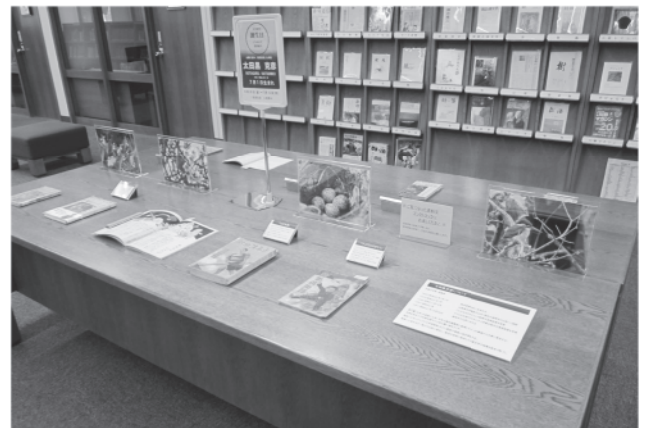
閲覧室の利用時間は、当面の間、午前九時から午後四時までとさせていただきます。

ご不便をお掛けいたしますが、ご了承ください。

このような中、ご来館の皆様は資料に



閲覧カウンター(アクリル板設置)



文学者の誕生日にちなんだ資料紹介 -太田黒克彦-

親しんでいただくための「閲覧室資料紹介」も規模を縮小して行っております。

これまで、「文学者の誕生日にちなんだ資料紹介」として太田黒克彦の展示(九月十七日までは望月百合子)、芥川龍之介の命日である河童忌にちなんだ資料紹介「芥川と河童」、「富士北麓をめぐる文学―富士山と15人の作家たち」などの展示を行いました。

九月十一日(金)からは、企画展と連動した「林真理子を読む」と題した資料紹介も行います。
ぜひ閲覧室にお立ち寄りください。

(資料情報課 山形敏貴)

「寄贈資料より」

(令和二年二月〜七月)

- 田部和氏より田部重治書簡ほか特殊資料三四五点、図書八二点、雑誌五点。
- 山本育夫氏より山本育夫書き下ろし詩集『ごはん』パンフレット一点、図書二点、雑誌三点。
- 齋藤喜美子氏より北杜夫宛津島佑子書簡一点。
- 手嶋尚子氏より飯田龍太書簡ほか特殊資料五二点。
- 田中さか江氏より「李良枝 二十七回忌」パンフレット二点。
- 津島香以氏より津島佑子「鳩の影の鳩」原稿ほか特殊資料九一七点、図書二点、雑誌一四点、視聴資料九点。
- 庄司達也氏より「芥川龍之介と大阪毎日新聞社 一九二四年一月「誠職事件」考」抜き刷り一点、雑誌一点。

次の皆様からも図書・雑誌をご寄贈いただきました。(敬称略)

- | | |
|--------|--------|
| 秋山 佐和子 | 沢登 清一郎 |
| 飯村 寿美子 | 志村 さゆ子 |
| 石井 宏紀 | 進藤 ひろこ |
| 一瀬 公弘 | 遠山 若枝 |
| 一瀬 多恵子 | 長瀬 和美 |
| 伊藤 一郎 | 中村 吾郎 |
| 井上 澄子 | 長郷 善隆 |
| 茨木 和生 | 秦 恒平 |
| 宇田川 昭子 | 平松 伴子 |
| 内海 宏隆 | 堀井 一摩 |
| 川島 幸希 | 山田 兼士 |
| 弦間 孝信 | 横川 翔 |
| 小林 晃 | 吉川 豊子 |
| 小山 弘明 | 米山 光郎 |
| 佐野 秀延 | 渡邊 美枝子 |

この他に団体の方々からも寄贈いただいております。

館からのご案内

※新型コロナウイルスの感染拡大の状況により、各催しを延期(または中止)する場合があります。

■教育普及事業

○年間文学講座

講座1・2とも講堂で定員50名 無料
午後2時～3時30分

・講座1「2020—古典文学入門—」

9月25日(金)「音読してみる平安文学のカタチ」

講師 加藤浩司(都留文科大学教授)

10月23日(金)「曹操と漢詩」

講師 寺門日出男(都留文科大学教授)
授)

11月27日(金)・12月18日(金)「上代文学と絵本①・②」

講師 鈴木武晴(都留文科大学教授)

・講座2「作家たちの一癖ある名作—幻想を描く、現実を描く—」

講師 大木志門(東海大学文学部教授)
授)

9月12日(土)

「泉鏡花『外科室』—愛と生と死と—」

10月17日(土)

「林真理子『女文士』—評伝文学の魅力—」

11月7日(土)

「三島由紀夫『金閣寺』と水上勉『金閣炎上』—事件を加工する方法」
12月12日(土)

「井伏鱒二『黒い雨』—書き得ないものを書く—」

*開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

○名作映画鑑賞会

10月25日(日) 午後1時30分

「こころ」 1955年 日活

11月14日(土) 午後1時30分

「青い山脈」 1962年 日活

会場 講堂 定員50名 無料

*開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

○朗読公演会

「ベルベットのうさぎ」

10月10日(土) 午後2時～(3時30分終了予定)

出演 紺野美沙子の朗読会
原作/マージェリイ・ウィリアムズ

100年前に書かれ世界的なロングセラーとなった児童文学『ベルベットティーン・ラビット』を朗読とピアノ

演奏、影絵でお楽しみください。朗読

のコツや影絵のからくりの解説、即興

演奏など盛りだくさんの楽しい90分

です。

会場 講堂

定員240名 座席指定 入場無料

※要申込。

*往復はがきでお申し込み下さい。1枚で2人までご応募いただけます。締切

9月18日(金) 必着

往信欄裏面に①イベント名、②郵便番号、③住所、④氏名、⑤電話番号、⑥

参加希望の人数、⑦代表者以外の参加

者返信欄裏面に①郵便番号、②住所、

③氏名をご記入のうえ当館までお申

し込みください。

*申し込み多数の場合は、抽選のうえ結果を1週間前頃までにお送りします。

◆展示室

○第一～四室(展示室A) 展示替え

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など

山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する

各コーナーの展示替えとともに、第一室で期間限定展示を次のとおり行います。

・秋の常設展 山梨の文学碑2

8月25日(火)～11月29日(日)

芥川龍之介「藤の花軒端の苔の老い

にけり」北杜市長坂町 清光寺

・冬の常設展 山梨の文学碑3

12月1日(火)～3月7日(日)

前田晁「一人の心は万人の心の根源はここにある」山梨市 万力公園

○第五室(展示室B)の展示替え

山梨出身・ゆかりの文学者一〇四名を二期に分けて展示しています。

・詩・短歌・俳句・川柳・漢詩

10月3日(土)～3月7日(日)

※第五室は、9月1日(火)～10月2日(金)、11月25日(水)は休室します。

■閲覧室(入場無料)

○閲覧室資料紹介

・「林真理子を読む」

9月11日(金)～11月23日(月・祝)

・「文学に描かれた天災」

3月10日(水)～4月4日(日)

○文学者の誕生日にちなんだ資料紹介

・望月百合子(9月5日生まれ)

8月28日(金)～9月17日(木)

・竹内てるよ(12月21日生まれ)

12月4日(金)～12月24日(木)

・武田泰淳(2月12日生まれ)

1月29日(金)～2月18日(木)

・深田久弥(3月11日生まれ)

3月5日(金)～3月25日(木)

資料翻刻

昨年度当館が収蔵した、英文学者で登山家、随筆家の田部重治(一八八四〜一九七二、富山県生まれ)資料から、木暮理太郎の田部宛書簡二通及び、深田久弥の田部宛書簡一通を翻刻する。

田部は東京帝国大学英文学科に入学した翌年の一九〇六(明治三九)年に、当時「ハガキ文学」編集者であった木暮理太郎(一八七三〜一九四四、群馬県生まれ)と初めて会い、やがて山行を共にするようになった。木暮は一九三五(昭和一〇)年、日本山岳会第三代会長に就任。著書に『山の憶ひ出』上下(一九三八・三九年 龍星閣)がある。

田部は、東京帝国大学を卒業後、東洋大学、法政大学等で教鞭を執る一方、イギリスの作家・評論家のウォルター・ペイターの翻訳と研究に携わり、いくつかの著書を残している。登山家としては未知の山稜、渓谷に入る探検的登山を行い、登山に對する思索、自然・風景への憧憬を綴った山岳紀行文や随筆を数多く残した。木暮と共に、奥秩父の山々の紹介者として知られている。

田部が木暮と画家の中村清太郎と三人で、一九一五(大正四)年五月、山梨県の笛吹川の上流部の渓谷、東沢を溯行した時の体験を記した紀行文「笛吹川を溯る」は、戦後の教科書に収録され広く知られるところとなった。田部と木暮はその翌年、翌々年と計三回にわたって東沢の溯行を試み、三回目に東沢支流の釜ノ沢を溯行して甲武信ヶ岳頂上に立つことに成功した。

今回とりあげる木暮の書簡の一通目は、それから十七年後に木暮が東沢―釜ノ沢を訪れた時の様子を報じ、森林伐採と鉄砲水等によって風景が一

変したことを嘆いている。

木暮の書簡は句読点が無いため、判読の便宜を図り、句点にあたる部分に空白をとった。本稿註において五十嶋一晃『田部重治の登山と英文学』(二〇一四年八月 田部重治研究会)を参考にした。

木暮理太郎 田部重治宛書簡

一九三四(昭和九)年六月一三日付

拝啓 御無沙汰御許し被下度候 「紀行と随筆」難有く拝受厚く御礼申上候 末女の病中ながらあまりくさくさするので先月中旅行する積の処追々延びて本月一日夜役所の若い者四人と同行十七年振りにて釜沢廻行 三日は雨に降られて東沢に滞在四日甲武信に上り破風小屋泊り五日雁坂を経て栃本泊り六日帰京致し候

東沢の変化には全く驚き申候 東沢西沢の合流点までトロコ通じ其処二大きな小屋あり 其上流にて東沢を堰止め沢を下せし木材(主として檜それに米榎など)を山と積み上げ直にトコにて搬出致し居り候 又兄と二度も泊りしことある段丘上の菅林署の掘立小屋ありし所にも二十人は泊れる小屋(東沢の小屋或は前面の岸壁を麴岩といふより麴岩小屋)建ち更に驚く可きは釜沢の釜の縁に三十人は泊れる小屋ありて目下金山沢にて檜の伐採中ニ有之候事に候 勿論名義は檜の立枯又は倒木の払下との事なれど内実は御推察に難からずと存じ候 其為か谷は非常に明るくなり崖崩れ多く沢の中は倒木や木の根伐り株等乱雑に堆積して昔の幽邃なる面影は更に見るよしもなく一歩く唯長大息するのみに有之 之は二三ヶ所に鉄砲の作られたることも谷を荒したる原因の一と存じ候 釜沢の出合も昔の三倍程も広くなりごろた石の河原となり申候 釜沢の第一瀑の上にも鉄砲有之

瀑も上部欠損してか稍や傾斜緩くなり大釜は埋もれて僅に三分ノ一となり周囲は明るく物凄き所は殆ど失はれ申候 釜沢は口元の外伐採せし様は見えぬどいつの年か非常に暴れしと見えて谷に横はる倒木非常に多く廻行ニ大邪魔をなし且途中突出せる岩に遮ぎられて飛舞せし四丈許の瀑はどうしたことか終に目に入らず残り惜しく思ひ候 両門の瀑の大釜も半以上は埋り一向に凄味なく殊に左瀑の空中に振れながら大釜に跳り込みし奇観は失はれて唯岩面を落下するのみなるは落口の欠けたる為ならんと存じガツカリ致し候 例の伏水の辺にて谷筋の不明なるに驚きしが今は水こそ伏流なれ金峯の御室の前程の立派なる谷筋あれば目くらならざる限り谷筋を見失ふ心配は無之候 伏流より上部は全く昔の俣にて漸く釜沢らしくなり懐しさ胸にこみ上げ申候 今度は少し右により過ぎ甲武信木賊間の鞍部(甲武信小屋あり)に出で荷を置き十五分にて甲武信の頂上に達し申候 尾根筋の道は手入れ行き倒木の煩なく余り楽過ぎて物足らぬ感あり 破風の登りにて偃松を見るを樂に致し居り候処余り道のよき為といふか、といつの間にか頂上につきて終に偃松を見ず 此日も濃霧なりしが昔この下りに二時間近くも途を探せしことを思ひて隔世の感有之 道のよきまゝ破風小屋(昔中村と三人にて泊りし鞍部)より其日に帰京することは難くもなしと存じ候

右の次第にて来まじき所に来たやうな感有之 遺憾に存じつゝも東沢に石楠花と躑躅の多きにも又一驚を吃し申候 満谷唯これ花の感有之 これは全く望外の幸と申すべくこの点頗る満足致し申候 然し得る所失ふ所を補ふに足らざることは申すまでもなく候

実はこの旅行にて外の所へ行くのが何だか恐ろしいやうな気が致し候

栃本のおばあさんはまだ達者にて頻りに懐がり申候

病人の都合にて表記の所へ移転致し候
末筆ながら奥様によろしく
草々
理太郎

田部兄 侍史

〈受〉杉並区阿佐谷北□□□ 田部重治様

〈発〉六月十三日 牛込区台町一八 木暮理太郎

〈註〉「日本山岳会用箋」(青色縦罫線、一二行書き)

五枚使用、封筒宛名・発信者共にインク使用。三

銭切手一枚添付。消印は「四□9・6・14 前8

—12」。

田部の『紀行と随筆』は一九三四(昭和九)年六月、大村書店刊行。木暮はこの頃、東京市嘱託職員として『東京市史稿』編纂に当たっていた。

木暮が驚いているトロッコは、中央線の塩山駅前から三富村(現・山梨市)の笛吹川上流部へひかれた三富塩山軌道のこと。一九三一年までに三富村広瀬まで開通、さらに一九三三年に上流の西沢溪谷の本谷まで開通した。上流で伐採した木材や鉱物、地域の人々の生活物資の運搬に使われたが、一九六五年、廃線となり、現在一部の軌道の跡が残る。(『三富村誌』一九九六年による)

山梨、埼玉、長野三県の境にそびえ奥秩父山塊の中央部に位置する甲武信ヶ岳(標高二、四七五メートル)は、西の稜線に国師ヶ岳、大馳峠、金峰山と続き、東は木賊山、破風山、雁坂嶺と連なる。雁坂嶺の東の鞍部が雁坂峠で、山梨から秩父へ抜ける秩父往還が通う。栃本はその関所のある集落で現在の秩父市大滝村栃本。田部と木暮の奥秩父行の帰着地となることが多く、田部の「笛吹川を溯る」の末尾は栃本の「秩父小林区署所在大村與一方」に到着して終わっているが、書簡の「栃本のおばあさん」については不明。

木暮理太郎 田部重治宛はがき

一九四二(昭和一七)年十二月二日付

拝啓

「詩と断章」どうも難有う 読む方に気をとられてお礼を申上げるのを忘れ、誠に申訳ありませんでした。

しかし僕は「潤ひがあり柔かみがありそして包容力の大きい味へば味ふ程滋味のにじみ出る田部思想が日本の山の文学に誰が何と言はうと最早儼として独自の領域をうちたてたことを信じて最も喜んでゐる一人です 中村君も山の絵の方で同様のことを完成しつゝあるやうに思はれます 詩も久振りに懐しく拝読しました 向寒の折柄御自愛第一尚ほ御面上の節万々

十二月二日

〈受〉杉並区阿佐谷北□□□ 田部重治様

〈発〉牛込区市ヶ谷台町一八 木暮理太郎

〈註〉二銭の官製葉書にペン書き。消印「牛込17・12・3 前8—12」。

田部の著書『詩と断章』は一九四二(昭和一七)年一月、七文書院刊。自作の詩と随想を収める。「中村君」は、山岳画家の中村清太郎(二八八八—一九六七、東京生まれ)。一九三六(昭和一一)年、日本山岳画協会を設立したメンバーの一人。前述、一九一五年五月、田部と木暮の初めての東沢溯行に同行した。

深田久弥 田部重治宛書簡

一九三五(昭和一〇)年一月三日付

拝啓

始めてお手紙を差上げる失礼お許し下さい。

もう数年前、私が改造社に勤めて居ました頃、一度お目にかかつて、改造に原稿を頂いた事がございますが、お忘れになった事かとも存じます。お書きになるものは殆ど読んで居りますので、よそながらなつかしく存じて居ります。

今度私さまことにお恥かしい本ですが、山の随筆紀行集を出したので、一部お手元へお送り致しました。お暇の折お読み捨て下されば幸甚に存じます。

一月三十日

深田久弥

田部重治様

〈受〉東京市杉並区阿佐谷□□□ 田部重治様

〈発〉神奈川県鎌倉町二階堂 深田久弥

〈註〉青色罫線、縦一五行書き便箋一枚、封筒宛名・差出人共に黒インク使用。三銭切手一枚貼付、消印は「鎌倉10・1・31 后4—8」。

深田久弥(一九〇三—一九七一、石川県生まれ)は、小説家、山岳紀行文家。第一高等学校を経て一九二六(大正一五)年、東京帝国大学哲学科に進学。翌年、在学中に改造社に入社し三年間編輯部に勤務した。この間に、田部が「改造」に寄稿したのは、一九三〇(昭和五)年八月号(第二二卷第八号)の一回のみで、随想「山を憶ふ」が五頁半にわたり掲載された。

文中、深田が贈ったという「山の随筆紀行集」とは、この前年末刊行された深田の最初の随筆紀行集『わが山山』(一九三四年一月 改造社)。この度当館が収蔵した田部の旧蔵本の中に深田の献辞が入った著書が何冊もあり、その中に『わが山山』もある。

館の日誌

- 2・28 (金) 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、展示室・
閲覧室・研究室休室 (～5・21)
- 5・22 (金) 夏の常設展 期間限定公開 山梨の文学碑1
山崎方代「ふるさとの右左口郵は骨壺の底にゆら
れてわが帰る村」甲府市右左口町 (～8・23)
- 6・23 (火) 閲覧室再開
- 6・26 (金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「太
田黒克彦」(～7・16)
- 7・17 (金) 閲覧室 河童忌にちなんだ資料紹介「芥川龍之介
と河童」(～7・31)
- 7・18 (土) 特別展示「甲府発の太宰治書簡」(～8・23)
- 7・21 (火) 学芸員実習 (～7・26)
- 7・25 (土) 夏のワークショップ「富士山×ハーバリウム」
講師 三嶋勝美
- 8・1 (土) 閲覧室資料紹介「富士北麓をめぐる文学」(～8・
27)
- 8・8 (土) 年間文学講座2「夏目漱石『琴のそら音』－幻想
作家時代の漱石」講師 大木志門(東海大学文
学部教授)
- 8・23 (日) 名作映画鑑賞会「野菊の墓」
- 8・28 (金) 年間文学講座1「『徒然草』と作者兼好法師を
めぐって」講師 佐藤明浩(都留文科大学教授)
- 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「望
月百合子」(～9・17)
- 9・5 (土) 文学創作教室
講師 三枝昂之(当館館長・歌人)
- 9・6 (日) 読書会

利用のご案内

■開館時間

- 展示室 9:00～17:00 (入室は16:30まで)
- 閲覧室 9:00～16:00
- 講堂・研修室 9:00～21:00
- 茶室 9:00～21:00 (準備・片付けの時間も含まれます)
- ミュージアムショップ 9:30～16:20

■休館日等 (9～3月)

- 9月7・14・23・28日
- 10月5・12・19・26日
- 11月4・9・16・24・30日
- 12月7・14・21日
- 年末年始は12月26(土)～1月1日(金)まで休館します。
- 1月12日(火)～1月19日(火)は館内整備等のため休館
します。
- 1月4・25日
- 2月1・8・15・22日
- 3月1・8・15・22・29日

■展示室観覧料

	常設展			企画展		常設展と 企画展の セット券
	個人	団体 (20名以上)	美術館 との 共通券	個人	団体	
一般	330円	260円	680円	600円	480円	740円
大学生	220円	170円	340円	400円	320円	490円

※高校生以下の児童・生徒、65歳以上の方(企画展は県内在
住者のみ)、障害者手帳を御持参の方とその介護者1名の観覧
料は無料です。

■施設利用のお申し込みについて

- 講堂・研修室・茶室の申込みは、使用しようとする日の6ヶ
月前から原則として10日前までです。
- ☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申し込み
の際、ご説明いたします。

■ご協力をお願い

- ・入館前に、チェックシートに必要事項をご記入の上、必ず受
付にご提出いただきますよう、お願いいたします。
なお、記入場所の混雑緩和のため、ホームページからチェッ
クシートを印刷し、あらかじめ記入したものをご持参いた
だきますよう、ご協力をお願いいたします。
- ・次のお客様についてはご来館をご遠慮ください。
－発熱、風邪症状、味覚障害など体調に不安のある方。
(展示室で激しく咳きこまれるなど、風邪のような症状の
ある方には、ご退館をお願いする場合がございます)
- －マスク非着用の方
- －新型コロナウイルス感染症患者の濃厚接触者として現在経
過観察中の方
- ・入館時の非接触での検温にご協力をお願いします。
- ・館内では、こまめな手洗いや手指消毒の徹底をお願いします。
- ・作品を鑑賞される際は、他のお客様と1m以上の距離を開け
てご鑑賞ください。
- ・壁や展示ケースには触れないようお願いいたします。
- ・展示室内の混雑を避けるため、入場制限を行う場合がございます。
- ・お荷物はお預かりできないので手荷物は最低限にしてい
ただくようお願いします。
- ・団体予約は10名までとさせていただきます。

山梨県立文学館 館報 第111号
令和2年9月10日発行

編集兼
発行人 三枝昂之

発行所 山梨県立文学館

〒400-0065

山梨県甲府市貫川一丁目5-35

☎ 055(235)8080 FAX 055(226)9032

<https://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>
※紙面・記事・写真等の無断転載・転用
はお断りします。